

## コーパスと直観の融合

——G4 への期待



石川慎一郎

### 1. データと直観

『ジーニアス英和辞典』が世に出て今年で20年目になる。『ジーニアス英和辞典』は、改訂のたびに、その最大の特徴である精緻な語法記述に磨きをかけ、いまや、英和辞書のみならず、世界のEFL辞書をリードする存在の1つとなっているが、このたび、コーパスを活用した「史上最大の改訂」を経て第4版（G4）に生まれ変わるという。

良い辞書の定義は難しいが、一言で言えば、データと直観、客観と主観、規範と記述の融合が果たされているか否かであろう。データだけでも直観だけでも良い辞書はできない。それらがうまくまざりあって初めて辞書は真に有用なものとなる。

かつては、経験を積んだ辞書学者が、内外の研究成果をふまえつつ、自らの直観によって一貫した言語の規範を組み立ててゆくというのが正統的な辞書の作り方であった。第3版（G3）までの『ジーニアス英和辞典』はこうした辞書学の伝統を色濃く継承する辞書であったが、G4は、コーパスの活用によって、新たに、データに基づく客観的言語事実の記述という魅力を加えたことになる。「コーパスと直観の融合」がどのような果実を生み出すのかに期待が高まる。

近年の英米の主要辞書は、その多くがコーパスを積極的に活用している。大量の英語データを客観的に分析することで、時には母語話者自身ですら気づいていない語のふるまいを解明するコーパスは、1990年代以降の英米（とくに英）の辞書編

纂を一変させたが、G4の誕生によって、英和辞書の世界においても本格的なコーパス活用の時代が到来したと言える。

### 2. 語義の配列

G3は、伝統的な辞書編纂法の到達点に位置する著作であるが、この20年間の英語学習者の多様化は著しく、G3を十分に使いこなせない学習者が増えていることも事実である。辞書を苦手とするこうした初中級の学習者を観察していると、現行の辞書の語義配列にも問題の一端があるように思われる。

たとえば、名詞 challenge を例に考えてみよう。“the challenge of teaching novice learners”——これはある論文の一節であるが、学生と論文を読んでいる、彼らが様に「初級学習者を指導するという挑戦」と訳すことが気になった。G3をはじめ、大半の英和辞書では「挑戦」が challenge の第1語義となっているが、教師にとって入門期の学習者を指導することは日々の営みであって、「挑戦」ではいささか大げさである。

この場合は、COBUILD<sup>4</sup>が第1語義にあげている“A challenge is something new and difficult which requires great effort and determination.”（challenge とは、新しく困難な物事のことで、多大な努力と重大な決意を必要とするものである）、または OALD<sup>7</sup>の第1語義である“a new or difficult task that tests sb's ability and skill”（能力や技術が問われるような、新しい、または困難な課題）のほうが文脈にじっくりくる。

もちろん、下まで読めば、G3にも「(やりがいのある)課題、難問」という語義があがっているのだが、大多数の学生は、第1語義を見て意味が通りそうだと、第2語義以降を見ることはほとんどない。つまり、学習辞書が真にユーザー・フレンドリーであるためには、「必要な語義が載っているかどうか」のみならず、「どの位置に載っているか」が問われることになる。

筆者の手元のコーパス・データを見る限り、challengeについては、カタカナ英語の「チャレンジ」から連想される「挑戦」という意味合いよりも、具体的な「課題、難問」という意味が優先されるべきであるように思われる。コーパス頻度をふまえた語義配列の見直しは、こうした細かな点にまで及ぶなら、辞書は学習者にとって、いっそう使いやすいものとなろう。

### 3. 語義の展開

語義記述にあたって、コーパスから得られた頻度データに立脚することは、辞書の検索性を高める上で効果的な措置であるが、頻度は決して万能の尺度ではない。とくに多義語については、頻度順に意味を羅列しただけでは、意味と意味のつながりや、語の持つ中核的な意味合いが曖昧になるという恨みがある。

語義配列には、頻度に加え、英語史的な意味の派生順序や、認知的な意味の展開順序などの要素も複合的に関与する。このため、語義をわかりやすく配列し、提示することは、長年にわたって辞書執筆者を悩ませてきた、まさに“challenge”の1つだったのである。

この点に関しては、G4で新たに導入されたという「語義展開図」が注目される。たとえば、名詞 account を例に考えてみよう。G3で account を引くと、勘定書、(賃借)勘定、報告、考慮、重要性、理由…などの意味が並んでいるが、初級学習者の目線で見れば、関連性の薄い語の羅列に過ぎず、そもそも、なぜ、「勘定書」と「報告」

と「考慮」が同じ単語の意味として存在するのか判然としない。

しかし、形態論的に考えれば、account は count 由来の語であり、これらの意味は、原則として count (数える) から派生したものと考えられる。つまり、経理上の数字を数え上げることが「勘定」であり、ある事象に関連する事実を人前で数え上げることが「報告」である。また、対象となる人や物を、忘れたり無視したりせずに、正當に数え上げてやるのが当該対象への「考慮・配慮」となる。

こうした認知的な意味の展開の順序は、必ずしも客観的な頻度データとは一致しない。ゆえに、頻度に基づく語義配列を徹底すれば、結果として、自然な意味派生から乖離した語義順序になることもありうるが、加えて、語義の展開過程を図解することができれば、学習者の理解はより立体的になる。

学習者は、「語義展開図」を手助けとして、語義欄に記載された断片的情報を相互に関連させ、account という語の総体や、語の中核的意味を掴み取ることができるであろう。「account=勘定」という単語集的な断片知識ではなく、「account=具体的・抽象的な各種の数え上げる行為や、数え上げられるものの総体」という高次のレベルでの認識こそが、学習者が持つべき語彙知識である。

「語義展開図」のような試みが言語教育の面で効果を挙げるためには、個々の語義情報を大胆に整理・範疇化し、範疇間の関係性をわかりやすく表示することが不可欠である。これは、コーパス・データだけでないうることではなく、経験を積んだ辞書学者にのみ可能なことである。

G4という新しい辞書の誕生によって、コーパスに基づく客観的言語データと、それを補う執筆者の直観との「幸福な結婚」が果たされ、日本の英語学習者にとっての新たな道標となることを期待したい。(いしかわ しんいちろう・神戸大学助教授)